

阮立 (RUAN LI)

1. 事業実施の目的

国際学会「メカデミア (Mechademia)」での口頭発表

2. 実施場所

アメリカ・ミネソタ州のミネアポリス芸術デザイン大学

3. 実施期日 平成 30 年 9 月 28 日 (金) から 10 月 2 日 (火)

4. 成果報告

●事業の概要

本学生派遣事業の目的は、平成 28 年度総研大文化科学研究科学生派遣事業による調査び、平成 29 年度のフィールド調査から得られた情報を、国際学会「メカデミア (Mechademia)」において発表することである。

「メカデミア」は、2001 年にアメリカ・ミネソタ州のミネアポリス芸術デザイン大学の主催で発足し、年に一回、ミネアポリス芸術デザイン大学で国際学術会議を開催する学会である。本学会は、北米において日本のアニメ・マンガ・ゲーム・ファン文化を研究対象とする唯一の国際学会とも言える。例えば、Marc Steinberg 教授は、この学会で成長した日本のアニメ・マンガ・ゲーム・ファン文化に関するの第一世代の研究者の一人である。彼の著書で『Anime's Media Mix: Franchising Toys and Characters in Japan』は、近年の英語圏において最も評価されている日本のアニメ研究に関する本である。本学会が発行する学術誌『メカデミア』は、2006 年以来会議開催ごとにオンラインで電子版が発行され、2019 以降、年 2 回紙媒体による雑誌が発刊される予定である。

今年度の「メカデミア」国際学会は、メインテーマとして“Transnational Fandom”を掲げて、議論が行われた。アメリカン、カナダ、イギリス、イタリア、プエルトリコ、日本などの国から 40 人前後の研究者が、ミネアポリス芸術デザイン大学に集まった。これらの研究者は、カルチュラルスタディーズ・メディアスタディーズ・人類学・社会学・歴史学・言語学などの視点から、日本のアニメ・マンガ・ゲーム・ファン文化が日本や海外やトランスネーションでの展開について、研究発表・映画試写会・学術交流を行った。

今回の会議では、8 つのセッションが設置され、各セッションは、更にパネル発表、試写会、学術交流会が設けられた。申請者は、セッション 4・パネル 8 で口頭発表を行った。発表の詳細は次節以降で述べる。発表のほか、申請者は、自分の研究と最も関係がある日本のアニメ・マンガ・ゲームのファン文化に関する次の 2 つのセッションに参加した。

セッション 2・パネル 3: “Otome Roads: Facebook, Fan Blogs, and BTS's ARMY”では、4 人の若手研究者が、アメリカ・イタリア・東南アジアのアニメ・ゲームのオンラインファン・コミュニティーの成り立ちや現状について、それぞれ発表した。

セッション 3・パネル 6: “Notes on Fandom: Controversies, Conundrums, and yet, Transcendence”:では、4 人の研究者が海外においてファンダムの異なる展開の問題点や可能性について発表を行った。この 4

つの発表の中で、申請者が特に気になったのは、Wartburg College の Joyce Boss 教授の発表 ”Landscape/ Fanscape: Godzilla Tourism as Transnational Transcendence” であった。彼女は、異なった文化に育った人々は、好きな作品の舞台である‘landscape’に身を持って体験することによって、その‘landscape’に関する共通の感情や経験を作り出し、その‘landscape’を彼らの‘fanscape’に変化させていくことを論じた。申請者は、昨年香港中文大学で行われた“East Asian Association of Anthropology”の年会において、“Authenticity in the Social Production of the ‘Fandomscape’ ”というタイトルで口頭発表を行った際に、‘Fandomscape’をキーワードとして使用したものの、それに関する理論的な検討を十分行っていないかった。今回 landscape と fanscape の関係性に関する Joyce Boss 教授の発表は、申請者にとって今後理論的考察を深める示唆を与えてくれたものであった。

本会議の終了後には、申請者はミネアポリス芸術デザイン大学の Frency Lunning 教授と面談を行った。Frency Lunning 教授は、「メカデミア」の創立者の一人であり、アメリカに拠点を置く数少ないコスプレの研究者の一人である。彼女は、5年間のフィールド調査に基づいて、斬新な理論的な枠組みを提示する単著“Cosplay: The Masque of Fandom”を来年春に出版する予定である。今回の面談は、この本の理論的な枠組みに焦点を当てて、議論を行った。Frency Lunning 教授は、コスプレを儀礼化されたファンダムの演出として取り上げ、コスプレイヤーたちがコスプレを通じて普段と異なる自分、ファンである自分を演じていると見解を示してくれた。教授との議論により、Latour の ‘multirealism (multiple identities, the existence of different modes of being)’に基く彼女の理論的な枠組みと、ブルデューや Lahire の「場 (field)」に基く申請者の理論的枠組みとの間の接点を見出したと同時に、博士論文の方向性について啓発をうけたと言える。

申請者は以上の会議や面談に参加することを通して、日本のアニメ・マンガ・ゲーム・ファン文化に関する最新の研究動向を把握でき、申請者の研究対象であるコスプレ文化を分析する最新の理論的な枠組みを入手することができた。それと同時に、これらの研究発表は海外における日本のアニメ・マンガ・ゲームのファン文化の展開について詳しく論じてきたが、日本におけるファン文化の展開や現状について、詳細な論述がなかったことも確認できた。

#### ●学会発表について

申請者は、セッション 4・パネル 8: “The Masquerades of Fandom”で発表を行った。発表タイトルは”Promoting the World Cosplay Summit in China’s Anime, Manga, Game Communities- Authenticity and Uncertainty in Intercultural Transaction (中国のアニメ・マンガ・ゲームコミュニティにおける『世界コスプレサミット』の普及活動－異文化交流における真正性と不確実性について)”である。

本発表は、博士課程の調査対象である名古屋の「世界コスプレサミット (World Cosplay Summit、以下コスサミ)」がいかにか、中国からの参加者により解釈、記録され、ドキュメンタリーを通じて中国のアニメ・マンガ・ゲームコミュニティに紹介された事例を考察、分析したものである。そして、ドキュメンタリーにおけるコスプレ表象の真正性及び、コスサミの文化的意味は、ドキュメンタリーの制作に関わる人々の意図によって構築されたことを明らかにした。

申請者は、発表の後、次のような質問を受けた。同じパネルには、プエルトリコのコスプレ事情を紹介する発表もあったため、基本的に、中国・日本・プエルトリコにおけるコスプレ文化の違いに関する質問が多かった。具体的に、それぞれの国におけるコスプレイベントの歴史や現状、コスプレを行う時のマナーやルール、コスプレのスタイル(撮影・パフォーマンス)、コスプレイヤーの性別的分布などの質問であった。また、学会発表後の **Frency Lunning** 教授との面会では、申請者の博論の課題に対して以下のようなコメント・助言をいただいた。今回のパネルの議論によって、世界各地で展開されるコスプレ文化は、それぞれの細かい違いが判明し始めた。同時に、コスプレパフォーマンスよりコスプレ撮影が盛んでいるという日本の特徴も明らかにした。今回の申請者の発表は、この日本の特徴を紹介したが、その理由はまだ論ずるに至っていない。なぜ、日本はコスプレ撮影に特化したか、それは日本社会、文化とどのような関係があるのか。また、コスプレ撮影を行うカメラマンやコスプレイヤーはどのような関係性を生み出したのか。これらの問題を、今後のさらなる調査や分析により、明らかにすることが期待できると、**Frency Lunning** 教授が申請者にコメントしてくれた。

#### ●本事業の実施によって得られた成果

本事業の実施により、以下の三つの成果を上げることができる。

- (1) 国際会議に参加することによって、北米における日本のアニメ・マンガ・ゲーム・ファン文化に関する最新の研究動向を把握できた。
- (2) 自分自身の口頭発表により、博士論文のテーマに直接関係する著名な研究者とディスカッションができた。それにより、landscapeとfandomscape/fanscapeの関係性や、場のみならず、コスプレとコスプレイヤーのアイデンティティーの関係性に関する示唆を得た。
- (3) 海外のコスプレ研究と比較しながら、申請者の博士課程の研究のオリジナリティーと可能性を確認できた。

#### ●本事業について

本事業の利用により、博士課程の研究に向けて、貴重な情報を獲得することができた。しかし、このような海外での研究発表に応募可能な助成制度が少ない。この現状において、特に、本事業のような渡航費の多くかかる海外での学会発表を行うためには、学生派遣事業は欠かせない制度である。今後も、このような事業が継続されることを切に願っている。